

学校教育課だより

# かけはし



学校教育課だより  
「かけはし」  
【第7号】  
令和2年  
12月21日発行  
御殿場市教育委員会  
学校教育課

## コロナが加速させた

### 「GIGAスクール構想」

教育総務課長 鎌野 武



令和二年もあと僅かで幕を閉じる。今年は新型コロナウイルスに振り回された一年となった。(まだまだ振り回されている途中だが...)今年一月に新型コロナウイルス感染症の報道が出たときは、漠然とした不安はあったものの、現在のように、いつでもマスク着用、どこに行ってもアルコール消毒、常に感染しないように注意して過ごす、などという生活になるとは微塵も思わなかった。ビジネスにおい

ても、テレワークやWeb会議の推進と働き方が変わった。私たちも、書面協議やWeb会議・研修と、他地域の人と対面での仕事が減っている。また多くの大学では遠隔授業が行われ、学生生活は一変した。こんなことになるとは予想もしなかった。  
そしてもう一つ、思いもよらない展開を見せたことがある。それは「GIGAスクール構想」による学校ICT環境の整備である。

「GIGAスクール構想」は、文部科学省が令和元年十二月に発表したもので、全国の小中学校の児童・生徒全員への「一人一台端末」と、ストレスなくインターネット上の情報やクラウドを利用できる「高速大容量の通信ネットワーク」の一体的な整備で、一人一台端末を「令和の時代における学校のスタンダード」と位置付けている。当初、一人一台端



プログラミング学習の様子

末は令和五年度までの整備予定であったが、新型コロナウイルスの影響で臨時休校が続き、遠隔操作による家庭教育の必要性が高まったこと、今後の災害や感染症の発生等の緊急時において、ICTの活用により全ての子供たちの学びを保証できる環境を早期に実現するとして、国は本年四月に緊急経済対策における補正予算で、一人一台端末を整備するための予算を全て令和二年度分に前倒ししたのだ。  
文部科学省は、この機に教育現場における全国的なICT整備の遅れと地域間格差を打破することを図ったものであるが、まさかこれまで遅々として進まなかった学校ICT環境の整備が一年余りでおおむね終了するとは驚きである。当市でも、遅れることなく整備計画を見直し、国庫補助の活用と財産区の支援を受け、令和二年度中に整備を完了する運びとなった。

むために、個別最適化された学びの実現であり、ICT環境の整備はその目的を達成するための手段である。一気にICT機器は整備されても、目的達成には、ICTスキル向上、情報モラル教育の強化、情報リテラシー向上等々、今後より進めなければならぬことは多々ある。また、機器が増えればその維持管理にも多大な労力が必要となり、ICT支援員の配置も急がれることとなる。  
新型コロナウイルスによって加速させられたGIGAスクール構想。これまでの教育ICT環境の整備に係るロードマップを大幅に軌道修正することとなるが、子供たちの未来のため、しっかりとした施策をもって進めていかねばならない。



原里中：技術科授業風景

教育センターだより

風薫る

# 「対話的な学び」を導く

指導員 湯山 伸彦

「対話的な学び」の視点で授業改善が進んできていることが実感できます。子供たちが、自分の考えを述べるとい

うことは、それだけでも学びはあると思います。しかし、話し合いをすることが、必ずしも深い学びに至るわけではあり

ません。かつて体験を重視した学習法が「体験あつて学びなし」と揶揄されたことがあり

ました。「対話あつて学びなし」にならないように心していかないといけません。

特に、次のような授業は心配になります。①対話が多用され過ぎている授業。毎時間が隣の人・班・全体の話し合いの連続で進んでいく。②基礎・基本的な知識・技能の習得がない授業。「何ができるようになるのか」という視点が無い。③教師が教えたり、指導したりする場面がない授業。ものもの見方・考え方を教えない。受容あるのみ。④教師の授業構想

が不十分な授業。教材解釈や子供理解が不十分。

子供たちが活発に意見を言い、活動していれば、学習が成立したと思ってしまう落とし穴があります。

そうならないように、次のことを再度考えて欲しいと思います。

一、単元を見通して計画を立てる。目標を達成するため、教師は何を教え、子供はどこで何を考え、何について話し合いをして深い学びに向かわせるのかを計画的に行う必要があります。二、基礎・基本を明確にし、知識・技能の系統性を考えて習得できるようにする必要があります。系統的に整理されていない知識や技能は応用が利きませんし、発展も望めません。三、教師が指導力を発揮すること。教師が、司会者か進行係のような役割しか果たさなかつたり、記録係のように発言を板書し、発言

者の指名まで子供に任せてしまつたりする授業もあります。それでは、深い学びどころか、目標に近づくことさえできません。

ここでは、二、の対話的な学びにおける教師の指導について考えてみます。

まず、本時の目標に迫る過程の中で、疑問や躓きを予想し、子供たちの心を惹くような課題を創り出すことが第一歩です。漠然とした課題ではなく、きちんと解決できる課題でなくてはなりません。そして、ただ「話し合え」と言われても話し合えません。子供たちが、話したくなるような状況を創り出すことです。

御殿場中学校の杉山拓先生は、社会科の導入で子供たちを引きこむような映像や資料を必ず提示します。そして、課題解決のための資料を用意して読ませ、考えさせます。そこで子供たちは、今まで知らなかつたことを知ることになり、考えも生まれます。子供たちは、知ったことや考えたことを話したくなり、競って発表します。そこで、また自分と違う考えを知り、さらに思考を巡らせませす。その循環が対話

の質を高めます。

しかし、子供の発言は理路整然としたものばかりではありません。思いつきや何となくというのがあります。

高根小学校の佳元隼人先生は、「どうしてそう思ったのか」「何を基にそう考えたのか」と必ず切り返します。一年生

には難しいかと思いましたが、豈図らんやしつかりと答えます。また、同校の鈴木奈央子先生は、説得力の無い話し方には、「みんなに解るようにもう一度説明してください」と必ず要求します。厳しいようですが、それで発言が減ることはありません。そこに教師と子供たちとの信頼関係を感じ

ます。子供の発言に対して、受容だけでは正しい学び、深い学びに導くことはできません。必ず内容を吟味し、正したり、修正したり、価値づけたりして、深い学びに繋げることが教師の仕事です。

また、学びの深まりには、「見方・考え方」の幅を広げ深めることが必要不可欠です。それは、教師の見識が問われるところであり、授業の質に直結します。弛まぬ研鑽と生徒理解を積み重ねて、教師と

して成長するための努力あるのみです。いい授業という概念や型にとらわれず、目の前の子供たちにとって力をつけたいのか、と強く願いながら向き合うことで道は広がると思えます。

**冬季休業明けの子供の表れに注視を**  
※自殺防止の視点をもって

長期休業明けは、児童生徒の自殺者数が急増する傾向にあります。特に本年度は、例年に比べ、自傷行為や命にかかわる事案の報告が多くなっています。

冬季休業に入るにあたり、改めて子供の生活状況や心模様をとらえ、休業明けにスムーズに学校生活に入っていくような準備をお願いします。また、三学期のスタートにあたっては、子供の表情や言葉から「兆しをとらえる」支援子供を認める・ほめる・励ますといった温かな言葉掛けを心掛けていきましょう。